

新 名 誉 会 員



住友金属工業株式会社 社友
河 西 健 一 殿

氏は、昭和16年12月東京帝国大学工学部冶金学科を卒業後、住友金属工業(株)に入社、和歌山製鉄所冶金管理部長、本社生産部長、取締役、常務取締役を経て、昭和53年住金化工(株)代表取締役社長に就任、昭和59年に同社会長に就任の後、平成元年に住友金属工業(株)の社友として現在に至っている。

この間、氏は自溶性焼結鈳の研究開発、高炉炉体管理技術および鋼塊製造技術ならびにコークス製造技術の開発育成に努め、我が国鉄鋼業の進歩発展に指導的役割を果たした。その主要な業績は以下に述べるとおりである。

(1)氏は高炉の主原料である自溶性焼結鈳の研究開発に成功しその使用により高炉の生産性とコスト低減を飛躍的に向上させた。この研究により昭和37年東京大学より工学博士の学位を授与された。特筆すべきは氏はこの技術が我が国鉄鋼業における生産コストの合理化に寄与することを念願し特許出願をせず、昭和33年にこれを日本鉄鋼協会共同研究会の席上で公表した。この技術は直ちに我が国製鉄各社に採用されるに至っており鉄鉄コストの低減に貢献している。本技術は昭和34年に科学技術庁長官賞、日本鉄鋼協会渡辺義介記念賞、大河内記念会大河内記念生産賞を相次いで受賞し、更に国際的にも極めて高く評価され、昭和34年、国際的学会である米国鈳山冶金石油技術者協会(AIME)より戦後、我が国において初受賞であるジャーナルオブメタルズ賞を、同36年、同協会よりロバートハント賞を受賞した。

(2)氏は昭和45年、住友金属工業(株)製鉄技術委員

会の委員長として高炉炉壁補修技術の重要性に着目しその開発実施を指導育成した。その実績により本技術は国内外製鉄所にも技術供与され高炉の安定操業に極めて大きな成果をあげている。また、氏は同社の製鋼技術委員会の委員長として、その高熱多粉塵という悪環境のため自動化が最も遅れていた鋼塊製造の自動化の重要性に着目し、鋼塊の下注自動鑄込技術の開発に取組みその育成指導に当たりその実施に成功し、下注鋼塊の表面品質並びに歩留の向上に多大の成果を挙げ国内外の大きな注目を集めた。

(3)また、氏は社業に従事するかたわら、科学技術庁資源調査会専門委員、通商産業省工業標準調査会委員、同省大型工業技術研究開発連絡会議委員、同省機械工業審議会専門委員および同省産業技術審議会専門委員等の公職を歴任し、その在任期間は延べ28年9ヶ月有余に及び、我が国科学技術及び産業の発展に尽くした功績はまことに大なるものがある。

特に本会事業の推進に当たっては、理事、監事、評議員、企画委員会委員長、共同研究会品質管理部会長等を務め本会発展に貢献した。

以上のような業績によって、氏は本会にあっては、昭和34年渡辺義介記念賞、昭和50年協会事業功労賞、昭和51年には香村賞を受賞した。一方国家栄典として昭和53年に藍綬褒章、昭和61年に勲三等瑞宝章を授与されている。

新 名 誉 会 員



日本鋼管株式会社 社友
堀 川 一 男 殿

氏は、昭和16年3月東京帝国大学工学部冶金学科を卒業、海軍技術将校(少佐)、運輸省鉄道技術研究所を経て昭和23年日本鋼管(株)に入社し、爾来技術研究所で所長室長、副所長、所長を歴任、昭和35年工学博士、47年取締役、51年技監に就任し、57年常勤社友、59年同非常勤に転じて現在に至っている。

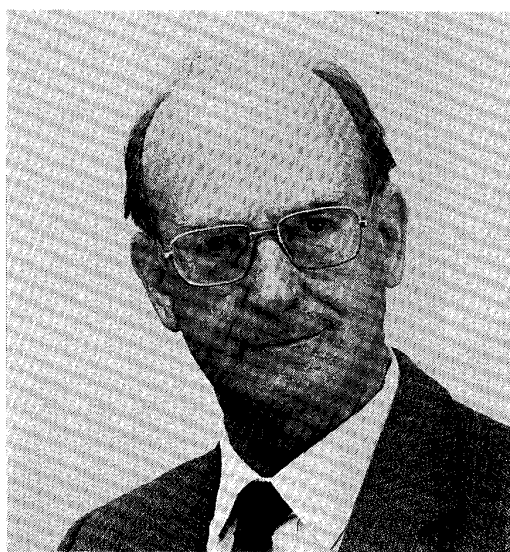
この間、氏は一貫して鉄鋼の新技術新製品の開発研究、技術研究所の管理と拡充並びに国際交流に尽瘁し、わが国鉄鋼技術研究の進歩発達に顕著な貢献をした。すなわち(1)高張力鋼、耐候性鋼等「溶接性低合金構造用鋼」につき基礎研究から開発・利用まで一貫実施し高く評価されているが、特に海軍でのSi-Mn鋼の研究は高張力鋼がわが国で創めて艦艇・橋梁等の溶接建造に採用された画期的な先駆的業績で、戦後の工業の発展に多大の寄与をした。(2)15年に及ぶ所長室長・副所長・所長の任期中に卓越した識見と指導力により研究所の環境整備を果敢に進め、いち早く海外へ留学生を派遣し、共同研究を結び、海外から研究者を受け入れ、多数の有能な研究者を育成した。(3)社業のかたわら横浜国立大学(5年間)、東京大学(2年間)、名古屋大学、東京理科大学等の非常勤講師、神奈川県工業技術研究連絡会副会長(44年より7年間)、神奈川県図書館協議会委員(43年より22年間、表彰2回)等を勤め、社会奉仕に献身した。

本会事業の推進については、理事(2期)、常務委員(2

期)、評議員(8期)を歴任し、主な業績は(1)昭和31年から約20年間の長期間編集委員、講演分科会主査、あるいは委員長として編集業務の発展に尽し、鉄鋼技術講座、鋼の熱処理、鉄鋼製造法、鉄鋼便覧等の企画・執筆を行い出版事業に協力した。(2)豊かな国際感覚をもち、協会主催の各種国際会議の運営に参画し、ISO事務局設置に努め、昭和59年「交流事業検討委員会」の委員長に選ばれるや現状を徹底的に検討して「国際交流委員会」の常設を提言、自ら委員長に就任して洞察力と決断力をもって中長期計画を企画立案し、これを軌道に乗せた。(3)わが国の特殊鋼は戦前主に兵器用だったのでその技術は軍の秘密上公表されていない。鉄鋼技術史におけるこの欠落を補うため氏は「旧陸海軍鉄鋼技術調査委員会」の設置を熱心に訴えて実現させ、昭和63年に委員長に就任し意欲的な活動を継続している。

以上の功績により本協会から渡辺義介記念賞(41年)、香村賞(50年)、協会事業功労賞(50年)が授与されている。氏はこの他日本金属学会監事、評議員、支部理事、溶接学会副会長(48年)、金属表面技術協会副会長(47年)、腐食防食協会副会長(52年)のほか多年広範な分野の学協会役員に就任し、日本金属学会功績賞(41年)学振腐食防止賞(43年)、溶接学会功績賞(51年)、日本材料学会功績賞(64年)等も授与されている。

新 名 誉 会 員



スウェーデン王立工科大学教授
Mats Hillert 殿

氏は1924年スウェーデン・イエテボリー市に生まれ、1947年チャルマース工科大学化学工学科を卒業後、金属研究所（ストックホルム）の研究員となり、米国マサチューセッツ工科大学に留学して1956年Dr. Sc.を取得し、1961年王立工科大学（ストックホルム）の物理冶金学教授に就任して現在に至っている。

氏はこの間、鉄鋼材料における相平衡、相変態、凝固現象、組織変化等の熱力学的解析を行い、多くの先駆的成果をあげ、鉄鋼組織学の進展に指導的役割を果たしてきた。特に、(1)スピノーダル分解の機構(2)パーライト変態の機構(3)ねずみ鑄鉄ならびに白鑄鉄の凝固機構(4)結晶粒の正常成長と異常成長(5)フェライト・オーステナイト間の平衡に対する磁性の効果(6)相変態に対する界面の役割(7)副格子モデルによる複合化合物の自由エネルギーの記述(8)セメントタイトのオストワルド成長に対する合金元素の効果(9)結晶粒成長に対する分散粒子の効果(10)拡散によって誘起される粒界移動現象などの解析は、いずれも英知に満ちた先見性のある研究であって、各方面に多大のインパクトを与えた。さらに、多元系状態図の熱力学的計算をコンピュータによって推進する手法の有用性にいち早く着目して、1973年にL. Kaufmanらと国際集会(CALPHAD)を結成し、その普及と発展に尽力すると共に、データバ

ンク(Thermo-Calc)を作成して、ヨーロッパ、アメリカを結ぶネットワークを確立し、鉄鋼のみならずセラミックスをも包含した多数の多元系状態図を解析した。

氏は、これらの卓越した業績により、Mehl賞(Met. Soc. AIME), Roozeboom賞(オランダ王立アカデミー), Acta Metallurgica賞, 村上記念賞, Brinell賞(スウェーデンIVA)をはじめ数多くの荣誉に輝き、さらに、チャルマース工科大学ならびにフランス・グルノーブル大学から名誉博士号を授与されている。また、米国のASM, Met. Soc. AIME両学会の特別会員、ならびにスウェーデン王立科学アカデミー会員に任ぜられている。

本会事業について氏は、本会が主催したInternational Conference on the Science and Technology of Iron and Steel(1970年)とInternational Conference on Physical Metallurgy of Thermomechanical Processing of Steels and Other Metals(1988年)に参加して基調講演を行ったほか、1989年1月よりISI InternationalのInternational Advisory Boardのメンバーを努めている。1990年春季講演大会においては湯川メモリアルレクチャーを行った。本会会員で氏より直接指導を受け、鉄鋼の各分野において中核的な活動をしている者も少なくない。また、1983年には学術振興会の招聘により来日し多くの大学・研究所で有意義な講義集会が開催された。